

冒襄『影梅庵憶語』訳注 (二)

大 木 康

この訳注は、『東洋文化研究所紀要』第一三六冊に掲載した「冒襄『影梅庵憶語』訳注 (一)」の後を承けるものである。底本や参照したテキスト等に関しては、前号をご覧いただければ幸いである。

依然としてよくわからない箇所は少なくない。重ねてご教示をお願いする次第である。

(16) 壬午清和晦日、姫送余至北固山下。堅欲從渡江歸里。余辭之力、益哀切、不肯行。舟泊江邊。時西先生畢今梁寄余夏西洋布一端。薄如蟬紗、潔比雪艷。以退紅爲裏、爲姫製輕衫、不減張麗華桂宮霓裳也。偕登金山。時四五龍舟衝波激盪而上。山中遊人數千、尾余兩人、指爲神仙。遶山而行、凡我兩人所止、則龍舟爭赴、廻環數匝不去。呼詢之、則駕舟者皆余去秋蒞回官舫長年也。勞以醵酒、竟日返舟。舟中宣磁大白盃、盛櫻珠數升、共啖之。不辨其爲櫻爲唇也。江山人物之盛、照映一時、至今譚者侈美。

壬午（崇禎十五年 一六四二 冒襄三十二歲）四月の三十日、彼女はわたしを送って北固山の下までやってきた。彼女はどうしてもいっしょに長江を渡り、わたしの郷里まで行きたいというのである。わたしは必死に断つたが、彼女はますますひどく悲しんで、帰ろうとしなかった。わたしたちは船を長江の岸に停泊させていた。時に西洋人の畢今梁（フランソワ・サンビアシ）がわたしに夏物の西洋布一端を送ってくれた。それは蟬の羽根のように薄く、雪のように白かった。薄紅色の裏地をつけ、彼女のために夏物の上着を作ったが、それは張麗華の月宮の霓裳にもおとらぬものであった。彼女といっしょに金山に登った。すると四五隻の龍舟が荒波をけたててはげしくこぎながら近づいて来た。山中の遊覧客数千人がわたしたち二人の後に付き従い、指さして神仙ではないかといっていた。山をめぐるて進んで行くと、わたしたち二人が立ち止まるところには龍舟が競ってやってきて、幾重にもとりかこんで立ち去ろうとしない。大声で尋ねてみると、舟をあやつっていたのはみな、去年の秋、浙江から帰って来た時に乗った官船の船頭たちなのであった。あひると酒を贈ってねぎらい、まる一日遊んで船に戻った。船の中には宣徳年製の白磁の大鉢があり、さくらんぼを数升も盛ってあって、一緒に食べた。それがさくらんぼであるのか、彼女の唇であるのか見分けがつかなかった。江山の風光と美しい人物とが一時に照りはえあつたさま、今でもしきりにすばらしいものとして語り継がれている。

【訳注】

○この一段は、前に述べられていた（第十段）、彼女が如阜に帰ろうとする冒襄を送って北固山まで来た時の回憶である。以下しばらくは、さまざまな遊覧の思い出が綴られる。

○「北岡山」。鎮江近くの長江にある三つの山、京口三山（北岡山、金山、焦山）の一つ。

○「西先生畢今梁」。イエズス会の宣教師 Le P. Francois Sambiasi のことである。この人については Le P. Louis Pfister, S.J., *Notices Biographiques et Bibliographiques sur Les Jesuites de L'ancienne Mission de Chine 1552-1773* (Chang-hai, Imprimerie de la Mission Catholique, 1932) にその伝が見える。これによれば、サンビアシは一六四四年前後に揚州府、蘇州府、寧波府のあたりで布教活動を行なっていたという。冒襄が西洋人の宣教師とも交際があり、贈り物のやりとりをするくらいにつきあいがあったことは興味深い。「西洋布」についてはよくわからないが、ヨーロッパ産あるいはインド産の絹布であろう。「蟬紗」については、元の楊維禎「内人剖瓜詞」に「美人睡起袒蟬紗、照見臂釵紅肉影」とある。「蟬翼紗」ともいう。

○「張麗華桂宮霓裳」。張麗華は、南朝陳後主の寵愛を受けた張貴妃のこと。唐の馮贄の『南部煙花記』『桂宮』に、陳後主は彼女のために月宮を作って桂の木を植え、彼女には白い着物を着せ、張嬪娥と呼んだとある。張麗華が霓裳（虹色のスカート）を着たということは『南部煙花記』には見えない。が、唐の玄宗皇帝の霓裳羽衣の曲は、やはり八月十五日に月宮に遊んだ折に聴いたものとする伝説がある（『樂府詩集』卷五六 舞曲歌辞五「霓裳辭十首」）。いずれも月に関係するところから来る連想である。

○「龍舟」。金山は龍舟のレースで有名であった。張岱の『陶庵夢憶』卷五「金山競渡」に、このレースのことが見え、五月一日から十日まで行なわれたとある（龍舟は五月五日端午の行事）。冒襄たちが訪れた四月三十日はその前日にあたる。龍舟が出ていて、多くの見物人がいたのもそのためであろう。ちなみに張岱も金山のレースを見たのは、壬午の年のことであったという。冒襄と同じ年に同じ場所にいたことになる。

○「鵝酒」。あひるの肉とお酒。『漢語大詞典』に「旧時常用作餽贈品」とある。

○「宣磁大白盃」。宣德年間官窯製の白磁のはち。

○「桜珠」。小粒のさくらんぼ。美人の赤く小さなくちびるを「桜唇」という。「不辨其為桜為唇也」はこの表現をふまえる。

(17) 秦淮中秋日、四方同社諸友、感姬爲余不辭盜賊風波之險、間關相從、因置酒桃葉水閣。時在坐爲眉樓顧夫人、寒秀齋李夫人、皆與姬爲至戚。美其屬余、咸來相慶。是日新演燕子箋、曲盡情艷、至霍華離合處、姬泣下、顧李亦泣下。一時才子佳人、樓臺煙水、新聲明月、俱足千古。至今思之、不異遊仙枕上夢幻也。

秦淮で迎えた仲秋の日、同社の各地の友人たちは、彼女が盜賊や風波の危険をもちえりみず、わたしのために道中苦勞して追いかけてきたことに感動して、桃葉渡の水辺の酒樓で一席設けてくれた。その時その場にいたのは眉樓の顧夫人、寒秀齋の李夫人で、みな彼女と最も親しい人々であった。彼女達は彼女がわたしのもとに来ることをすばらしいと思い、祝福しに来てくれたのである。この日、新作の『燕子箋』が上演されたが、曲は艷なる情を描きつくしており、霍都梁と華行雲とが離ればなれになる場面で、彼女は涙をこぼし、顧や李も涙をこぼした。その時の才子と佳人、もやに煙る水辺の樓台、新作の戯曲と明月、いずれも永久に伝えるに足るものであった。今にして思えば、遊仙の枕の夢幻にほかならなかったのである。

【訳注】

○「秦淮中秋日」。この日のことはすでに前にも見えていた(第十二段)。冒襄が郷試を終え、試験場から出てくると、彼女がだしぬけに「桃葉寓館」に訪ねてきたとあったその日である。冒襄は秦淮の桃葉渡の近くに宿を取っていた。

○「眉樓顧夫人」。顧眉。『板橋雜記』中巻にその伝が記される。眉樓という建物に住んでいたという。彼女は後に、龔鼎孳に落籍される。

○「寒秀齋李夫人」。『板橋雜記』下卷「松風閣社集」に、松風閣で開かれた社友の宴会に雪衣と眉生とがいたとある。眉生は顧媚、雪衣は李十娘である。李十娘の伝は『板橋雜記』中巻にある。「中構長軒、軒左種老梅一樹。花時香雪霏拂几榻」とあって、あるいはこの梅の木故に寒秀と名づけていたのかもしれない。

○「燕子箋」。阮大鍼の戯曲。現在見られる最も古い版本である毛恒刊『石渠伝奇四種』の『詠懷堂新編燕子箋記』には崇禎十五年十月桐山韋佩居士の「詠懷堂新編燕子箋記序」が付されており、この年に作られたらしいことがわかる。中秋の頃に上演され、十月頃には出版が企図されたことであろう。「霍、華の離合」とあるが、それは第十九齣「偽緝」を指すか。霍は男主角の霍都梁で科擧の受験生、華は女主人公の一人華行雲で妓女。霍、華の境遇は冒襄、董小宛のそれと合致している。阮大鍼は宦官魏忠賢の一味であったとして、復社成員たちからは毛嫌いされているのであるが、張岱『陶庵夢憶』卷八「阮円海戯」にもいうように、白らの戯班を持ち、戯曲作者としての腕前はなかなかのものであったようである。冒襄輯『同人集』卷十、黄雲「乙丑長夏得全堂觀劇留別巢民先生」に和した冒襄の詩の自注に「時に此の劇（『燕子箋』を指す）を極賞す」とある。

○「遊仙枕」。「開元天寶遺事」「遊仙枕」に見える。亀茲国が献上した枕で、これを使うと十洲、三島、四海、五湖などが夢に見られるというもので、帝（玄宗皇帝）が遊仙枕と名づけたとある。

(18) 鑾江汪汝爲園亭極盛、而江上小園、尤收拾江山勝概。壬午鞠月之朔、汝爲曾延余及姬於江口梅花亭子上。長江白浪擁象、奔赴杯底。姬轟飲巨巨羅。觴政明肅、一時在坐諸妓、皆頽唐潰逸、姬最溫謹。是日豪情逸致、則余僅見。

鑾江（儀徵）の汪汝爲の園亭はたいへんりっぱであり、長江のほとりの小園からは特に江山のよい景色を見晴らす

ことができた。壬午（崇禎十五年）の九月ついたち、汝為はわたしと彼女とを江口の梅花亭に招いてくれた。長江の白波は象を擁したかのごとく、酒杯の底にまで押し寄せて来た。彼女は大きな杯で豪快に飲んだ。酒杯のやりとりが厳格であつたために、同席していた妓女たちはみな意気地なくも総崩れになつてしまつたが、彼女は最もきちんとしていた。この日のように豪快で優雅なさまはわたしも滅多に見たことがないものである。

【訳注】

○八月十五日に郷試が終了し、董小宛の落籍問題にとりかかろうとしたところで、十七日、父親の帰郷の舟にめぐりあい、一緒に如皋に向かうことになった。が、鑾江（儀徵）で郷試の発表を待て、との父親の命によつてここに留まつたことは前に見えた（第十三段）。これはその折のことであらう。

○「鑾江汪汝為園亭」。未詳。光緒『儀徵縣志』卷六、名蹟、園に「汪園 府志云、在大市口西。雍正間汪修敏築、今廢」とある。この汪園は場所（大市口は城内である）からいっても、時代からいっても、この汪汝為の庭園ではないが、同じ条に続けて、「按胡志藝文有李站遊江上汪園詩、秋空清似洗、江上數峰藍。湛閣臨流敞、靈巖傍水含。時花添勝景、良友縱高談。何必携壺榼、窮奇意已酣。又有張錫文真州汪園詩、江流寂寂幾瀟迴、半堵依然風景俱。黃石已移遊子席、青松猶待故人來。雲停有句天難問、花落無聲徑悉埋。蒼橘一枝留秀色、模糊憶去讀書台。与雍正間大市口之汪園異。附識於此」とある。こちらの汪園は、詩の内容から見て、長江に臨んでいたようである。これが汪汝為の園亭であらうか。

○「長江白浪擁象」。水と象の関わりについては、仏典（例えば『優婆塞戒經』など）に、河を渡る象を菩薩の最も深い悟りにたとえた例がある。

(19) 乙酉、余奉母及家眷、流寓鹽官。春過半塘、則姬之舊寓、固宛然在也。姬有妹曉生、同沙九畹登舟過訪。見姬爲余如意珠、而荆人賢淑、相視復如水乳、群美之、群妬之。同上虎邱、與余指點舊遊、重理前事。吳門知姬者、咸稱其俊識、得所歸云。

乙酉（順治二年 一六四五 冒襄三十五歲）の年、わたしは母や家族をつれて海寧に仮住まいした。春に半塘をたずねたところ、彼女の旧居はむかしのままであった。彼女には妹の曉生がおり、沙九畹と一緒に船にのつてたずねてきた。わたしが彼女を如意珠のように大切にしており、しかも妻は賢くしとやかで、たがいに水と乳のように親しみあっているのを見て、みながほめ、みながうらやんだ。一緒に虎丘にのぼって、かつて遊んだ地を指さしながら、昔のことを思い起こした。蘇州で彼女を知る者はみな、彼女に人を見る目があり、よいところに納まったといつて称賛した。

【訳注】

○これは清初の混乱に際して海寧に避難した折のこと。後文に詳しい記述がある。

○「妹曉生」。『板橋雜記』中巻「董年」に、「董年、秦淮絶色、與小宛姉妹行。艶冶之名、亦相頡頏」とある。曉生はこの董年であろう。

○「沙九畹」。前出（第二段）。

○「如意珠」。何でも願ひ事がかなう宝珠。梵語の「真多摩尼」。仏典（『智度論』など）に見える語。

○「相視復如水乳」。水と乳とは混ざりやすいことから、仲のよいことのたとえ。『最勝王經』に「上下和穆猶如水乳」とある。

○虎丘に登れば、董小宛の家のある半塘は眼下に見えるはずである。

(20) 鴛鴦湖上、煙雨樓高。逶迤而東、則竹亭園半在湖內。然環城四面、名園勝寺、夾淺渚層溪、而激澗者皆湖也。游人一登煙雨樓、遂謂已盡其勝、不知浩瀚幽渺之致、正不在此。與姬曾爲竟日游。又共追憶錢塘江下桐君嚴瀨、碧浪蒼巖之勝、姬更云、新安山水之逸、在人枕竈間、尤足樂也。

鴛鴦湖の上に、煙雨樓がそびえている。曲がりくねった道を東の方へゆくと、竹亭園は半ばは湖の中にある。だが城壁の四方の名園や名刹には、どこにも水の中の小島や幾すじもの小川があつて、キラキラ美しくかがやいているのはみな湖なのである。ここに遊ぶ者はみな煙雨樓に登つてしまうと、もうその勝景は見尽くしたといつて、ひろびろとしてしかも静かで繊細なすばらしさはほかにあることを知らない。わたしは彼女と一口中遊んだのである。また彼女とともに錢塘江の桐君山や嚴子陵の釣台のあたりの青い浪、切り立った断崖の勝景を思い起こして話をしたとき、彼女はさらに「新安の山水のよいところは、それが寢室や台所のように身近かに感じられるからとりわけ楽しいのだ」といった。

杜茶村曰、金山一點、屹當匹練之中。臙粉六朝、香染金陵之地。樓名煙雨、湖字鴛鴦。而二妙采眞、披雲擲秀、

讀之令人歩歩欲仙。寧但兩越天都嵐翠沾灑衣裾已也。

杜茶村曰く「金山の一点はねりぎぬのような長江の中にそびえ立っている。六朝時代以来のべにおしろいの香りが金陵の地にはただよっている。楼の名は煙雨といい、湖は鴛鴦という。二人のすぐれた人物が山水の勝景を訪ねたさまが、雲のはれるようなすばらしい文章で描かれ、これを読んでいると、一步一步仙人になって空に舞い上がるかのようなのである。どうして兩越の天都峰の山の翠が衣のすそを湿らせるといったことに止まろうか。」

【訳注】

○『如臯冒氏叢書』本では、以上五段を総括し、末尾に「紀遊」と記している。

○「鴛鴦湖」。嘉興県城の南にある南湖のこと。その中の島に名勝煙雨楼がある。

○「桐君巖瀨」。錢塘江の上流富春江にある名勝、桐君山と巖陵瀨（巖子陵釣台）。浙江省桐廬県。杭州から衡嶽に向かった冒襄も、黄山白嶽に遊んだ董小宛も、ともにここを通過している。「新安山水」も富春江に注ぐ新安江の風光。こちらは新安江をさかのぼって徽州に向かった董小宛しか見ていないのかもしれない。

○「匹練」。長江のこと。謝朓「晚登三山還望京邑」詩の「澄江静如練」をふまえる。

○「采真」は「莊子」天運篇にみえる。もとは天然自然に任せる意とされるが、後には「求仙修道」を指すようになる。ここでは山水の勝景をたずねる旅のことを指しているよう。

○「天都嵐翠沾灑衣裾」。天都は黄山の最高峰、天都峰のこと。杜牧の「除官帰京睦州雨霽」詩の「嵐翠撲衣裳」「溪山侵兩越」、王維の「山中」詩の「山路元無雨、空翠湿人衣」をふまえた表現。

(21) 虞山宗伯送姬抵吾臯、時余侍家君飲於家園。倉卒不敢告嚴君。又侍飲至四鼓、不得散。荆人不待余歸、先爲潔治別室、幃帳燈火器具飲食、無一不頃刻具。酒闌見姬。姬云、始至止不知何故不見君。但見婢婦簇我登岸、心竊懷疑、且深恫駭。抵斯室、見無所不備。傍詢之、始感歎主母之賢、而益快經歲之矢相從不誤也。自此姬扁別室、却管絃、洗鉛華、精學女紅。恆月餘不啓戶、耽寂享恬。謂驟出萬頃火雲、得憩清涼界。回視五載風塵、如夢如獄。居數月、於女紅無所不妍巧。錦繡工鮮、刺巾裾如蟻無痕、日可六幅。剪綵織字、縷金廻文、各厭其技。針神針絕、前無古人已。

虞山宗伯（錢謙益）が彼女を送ってくれ、彼女が如臯に着いた時、わたしは父上に相伴して屋敷の庭園で酒を飲んでた。突然だったので父上に話すことはできなかった。そこでまた相伴して四更（午前二時）まで飲んだが、なかなか散会しなかった。妻はわたしが帰るのをまたずに、先に彼女のために別室をきれいにとのえ、とばり、灯、食器、飲食など一つとしてすぐに準備されないものはなかった。酒宴も盛りを過ぎたころ彼女に会えた。彼女がいった。「最初来たとき、何故あなたにお目にかかれなかつたのかわかりませんでした。ただ下女たちにとりかこまれて岸に上がらされたので、心ひそかに疑いの気持ちをおいだし、さらに深いおその心を持ったのでした。でもこの部屋にやってくると何一つ備わらないものはありませんでした。そばのものにたずねてみて、はじめて奥方様のやさしさに感激し、一年にわたってあなたに従いたいと誓ったのがまちがってはいなかつたことで、ますますうれしくなりました」と。それからというものの、彼女は別室にカギをかけてとじこもり、管絃をしりぞけ、おしろいを洗いおとして、一生懸命針仕事を学んだ。いつも一月あまりにわたつてとびらも開かず、静寂にひたり平穩を楽しんだ。いうには、「にわか

万頃の炎の雲の中から出て、清涼世界に憩うことができました。色町での五年の月日を思い起こすと、夢のようでもあり牢獄のようでもあります」と。数カ月もすると針仕事がすっかり上手になった。錦の刺繡は鮮やかであり、巾衿の刺繡の針あとは、のみの卵のように細かいもので、それが一日に六幅もできた。細かい図柄の縫い取りをしたり、文字を刺繡したり、回文を細かく刺繡したりといったことに存分に腕をふるったのである。その針さばきは神業のように絶妙であつて、古人も及ばぬほどであつた。

【訳注】

○『如皋冒氏叢書』本では、この一段の末尾に「紀静敏」と記されている。

○「清涼界」。『智度論』卷三に「人大熱悶、得入清涼池中、冷然清了、無復熱惱」とある。

○「如蟻無痕」。「蟻」は、のみの卵。細かいものたえ。『西廂記』第五本第三折「白鶴子・五煞」に「這鞋襪兒、針脚兒細似蟻子、絹帛兒膩似鵝脂」とある。

(22) 姫在別室四月、荆人攜之歸。入門、吾母太恭人與荆人見而愛異之、加以殊眷。幼姑長姊、尤珍重相親。謂其德性舉止、迥非常人。而姫之侍左右、服勞承旨、較婢婦有加無已。烹茗剝果、必手進。開眉解意、爬背喻癢。當大寒暑、折膠鑠金時、必拱立座隅、強之坐飲食、旋坐旋飲食、旋起執役、拱立如初。

彼女は別室に四ヶ月いたあと、妻が手をたずさえて家にやって来た。門を入って来ると、母の太恭人と妻とは一日

見て気に入る、特別に眼をかけた。年上年下の女たちは、特に大事にして彼女と親しんだ。そして「彼女の手柄ものごしは遠く常人をこえている」といった。彼女が左右のものに仕え、命を受けて仕事をする様は、下女と比べても、上手を行くばかりであつた。お茶をいれ、果物を剥く時もかならず手ずから進めた。につこり笑つて人の思惑を察し、かゆいところに手がとどくようであつた。寒くて膠が折れ、暑くて金属が溶けるような時でも、必ずすみっこに恭しく立つており、座つて食べるようにいつても、すぐに座つてすぐに飲食をすませてしまふと、またすぐに立つて給仕をし、前のように恭しくひかえているのであつた。

【訳注】

○「有加無已」。どんどん増えて、減ることがない。『春秋左氏伝』昭公七年に「寡君寢疾、於今三月矣、並走群望、有加而無瘳」。

(23) 余毎課兩兒文、不稱意、加夏楚、姬必督之改削成章、莊書以進、至夜不懈。閏九年、與荆人無一言柄鑿。至於視衆御下、慈讓不違、咸感其惠。余出入應酬之費、與荆人日用金錯泉布、皆出姬手。姬不私銖銖、不愛積蓄、不製一寶粟釵鉞。死能彌留、元旦次日、必欲求見老母、始瞑目。而一身之外、金珠紅紫盡却之、不以殉。洵稱異人。

わたしが二人の息子に文章を課し、気に入らなくて鞭を加えた時にはいつも、彼女は必ず子供たちを監督し、文章が体を成すように添削し、きちんと清書して持ってこさせ、夜になつても手をゆるめなかつた。九年のあいだ、妻と

の間に一言のいさかいがおこったこともなかった。みんなを監督し、下々のものを使う場合には、やさしくひかえめにするにとつとめ、皆がその恵みに感謝した。わたしが出かけたり人と付き合ったりする費用と、妻の日用の金銭はみな彼女が管理していた。ほんのすこしも私せず、へそくりなどしようともせず、小さな宝石の髪飾り一つ作らなかった。今わの際、元旦の翌日、老母にお目にかかりたいといつて、会うとやつと息を引き取った。棺の中にはその亡骸だけを納め、金銀宝石や色とりどりの着物などすべてしりぞけた。まことに非凡な人といえよう。

杜茶村曰、斷斷是再來人。一毫不苟、一絲不掛。誠然而來、誠然而往。吾以比之董永織女、薛嵩紅線。

杜茶村曰く「まちがいなくすぐれた人物の生まれ変わりである。ほんのわずかのものもゆるがせにせず、ほんの少しのものも私しなかった。誠実にやってきて誠実に去っていった。わたしは彼女を董永における織女、薛嵩における紅線になぞらえたのである。」

【訳注】

○「如皋冒氏叢書」本では、この二段の末尾に「紀恭儉」と記されている。

○「余每課兩兒文」。冒襄には、崇禎七年生まれの長男袞（崇禎十一年没）、崇禎八年生まれの次男禾書、崇禎十二年生まれの三男丹書があった。二人の息子とは禾書と丹書のこと。董小宛が冒家に來た崇禎十五年には、禾書は七歳。ここは八股文の課題だと思われるが、董小宛にはそれを見られるだけの学力があったのである。

○「金錯泉布」。金錯は金錯刀。王莽時代の貨幣。泉布も貨幣のこと。ここでは妾であつた董小宛が家政の管理をしていたことがわかるが、金銭その他の管理が主婦（正妻）の権利であつたことを考えると、彼女に対する信頼の度合いが普通ではなかつたことがわかる。

○「弥留」。いまわの際。『尚書』「顧命」に「病日臻、既弥留、恐不獲誓言嗣茲」。

○「再来人」。『漢語大詞典』に「猶某某再世。多指后起之秀」とある。具体的には、後に見える「織女」や「紅線」の生まれ変わりのこと。

○「董永織女」。干宝『搜神記』巻一「董永」。董永は孝行もので、天が織女をつかわして彼を助けた。

○「薛嵩紅線」。唐代伝奇「紅線伝」。紅線は女侠であり、薛嵩の危機を救った。

(24) 余數年來、欲哀集四唐詩。購全集、類逸事、集衆評、列人與年爲次第、每集細加評選、廣搜遺失、成一代大觀。初盛稍有次第、中晚有名無集、有集不全、并名集俱未見者甚夥。品彙、六百家大略耳。卽紀事本末、千餘家名姓事蹟稍存、而詩不具。全唐詩話更覺寥寥。蘭隅先生序十二唐人、稱豫章大家藏中晚未刻集七百餘種。孟津王師向余言、買靈寶許氏全唐詩數車滿載。卽龔流寓鹽官、胡孝轅職方批閱唐人詩、劖劂工費、需數千金。僻地無書可借、近復裹足牖下、不能出遊購之。以此經營搜索、殊費心力。

わたしは數年來「四唐詩（全唐詩）」の編纂をしようと思つていた。そこで詩集をすべて購入し、詩人の逸事を分類し、多くの評語を集め、詩人別、年代順にならべ、集毎に細かく評選を加え、広く失われた作品を搜し、一代の大觀

としようとした。初唐盛唐についてはほぼ目鼻がついたが、中唐晩唐については、詩人の名がわかってても集がなかったり、集があっても完全でなかったり、名も集もともに未見だったりというものがたいへん多かった。『唐詩品彙』は、六百名の詩人のあらましにすぎない。『唐詩紀事』なども、千人あまりの姓名と事跡が記録されているが、詩は備わっていない。『全唐詩話』については、さらに寥寥たるありさまのように感じられた。蘭隅先生は『十二唐人集』に序文を書いて、「予章（江西の南昌）の大家で中晩唐の未刻の集七百餘種を持つている人がいる」といつている。また孟津（河南）の王先生はわたしに「靈宝（河南）許氏的全唐詩を買つて、車数台分であった」といつた。以前、海寧に仮住まいしたとき、胡震亨が唐人の詩を批閲し、刊行するのに数千兩の費用がかかったということだった。如皐は僻地で書物を借りることもできず、しかも最近は窓下（机前）を離れることもならず、よそへ出かけて買うこともできなかつた。そのため、あれこれ苦勞して搜すのに、ことのほか氣力を尽くしたのである。

【訳注】

○「欲哀集四唐詩」。清の康熙帝の時代に『全唐詩』として完成を見る唐詩全集編集の試みが、この明末清初の時期に諸処で始められていた。ここにも見える胡震亨の『唐音統籤』、また錢謙益・季振宜のいわゆる『全唐詩稿本』（台湾聯經出版より『明清未刊稿彙編』の一つとして影印されている）など、いずれも同じ時期の仕事であるが、冒襄もまた同じことを考え、準備を進めていたことがわかる。冒襄が企画していた『全唐詩』は、時代順に並べられた詩人について、その実作品のほかに、伝記（逸話）、評論、批評までもが兼ね備わったものであった。これができていたら、現在ある『全唐詩』をも越えたものになっていたであろう。

○『唐詩品彙』。九十卷、拾遺十卷。明の高棅の輯。唐の詩人六百二十家の詩五千七百六十九首を品別に分類している。

○『唐詩紀事』。八十一卷。宋の計有功の撰。唐の詩人千百五十名について、伝記逸事や詩を集めている。

○『全唐詩話』。六卷。唐の詩人三百二十四家についての詩話を集めている。

○『蘭隅先生序十二唐人』。蘭隅先生は、朱之蕃。『中晚唐十二家詩』が内閣文庫、北京師範大学図書館に蔵されている。だが、それらの序文にここに引かれた文字は見えない。

○『孟津王師』。王鐸（涂元洛注に指摘）。天啓二年の進士。『清史列伝』巻七九に伝あり。書家として著名。

○『靈寶許氏全唐詩』。未詳。

○『胡孝轅職方批閱唐人詩』。胡孝轅職方は胡震亨。兵部職方司員外郎になっている。『唐音統籤』は崇禎八年（一六三五）に完成している。胡震亨については、周本淳「胡震亨的家世生平及其著述考略」（『杭州大学学报』一九七九年第四期）、同「有関胡震亨材料補正」（同前一九八二年第十二卷第三期）。『唐音統籤』については、兪大綱「紀唐音統籤」（『国立中央研究院 歴史語言研究所集刊』第七本第三分 一九三七）がある。『唐音統籤』は日本では宮内庁書陵部、広島大学文学部に蔵される。

(25) 然毎得一帙、必細加丹黃。他書中有涉此集者、皆錄首簡、付姬收貯。至編年論人、進之唐書。姬終日佐余稽查抄寫、細心商訂、永日終夜、相對忘言。閱詩無所不解、而又出慧解以解之。尤好熟讀楚辭、少陵、義山、王建、花萼夫人、王珪三家宮詞。等身之書、周迴座右、午夜衾枕間、猶擁數十家唐詩而臥。今祕閣塵封、余不忍啓。將來此志、誰克與終。付之一歎而已。

しかし、一帙の書物を手に入れるたびに、必ず細かく朱筆を加えた。他の書物でこの集に言及するものがあれば、

みな書物の始めに書き記しておき、彼女にわたして保存させたのである。詩人の編年については、『(新)唐書』を基準にした。彼女は一日中わたしを助けて調べものを書き写したりし、注意深く校訂し、昼も夜も向かい合ひながら黙って仕事に精を出した。彼女は詩を読めばすっかり理解し、また気の利いた解釈を出したものだ。特に『楚辞』、杜甫、李商隱、そして王建・花夔夫人・王珪の『三家宮詞』を好んで熟読した。身の丈ほどの書物を机のまわりにつみあげ、真夜中のベッドでもなお数十家の唐詩集をかかえて横になった。いまこの部屋も封印されほこりだらけになって、わたしは開けるに忍びない。これから先、全唐詩集編纂の志は誰といつしよに完成させたらよいのだろうか。ため息をつくばかりである。

【訳注】

○『三家宮詞』。毛晋の輯。『詩詞雜俎』に収められている。天啓五年（一六二五）の毛晋の序が付されている。

○『同人集』卷三に杜濬の「題董宛君手書唐絶」がある。冒襄の選んだ唐代絶句集のできればえをほめ、刊行すべきであるといひ、一方で董小宛の手書きの本を見たのは私一人だということを誇っている。

(26) 猶憶前歲、余讀東漢、至陳仲舉范滂諸傳、爲之撫几、姬一一求解其始末。發不平之色、而妙出持平之議、堪作一則史論。

いまでも忘れられないのが、一昨年『後漢書』を読んで陳蕃・范滂・郭太らの伝にいたり、わたしが机をたたいて

いたところ、彼女はその一つ一つについて細かく解説するよう求めた。(話を聴いて) 不平そうな顔つきをみせたが、公平な議論を展開し、一則の史論というに十分なものであった。

【訳注】

○「読東漢、至陳仲拳范郭諸伝」。陳仲拳は陳蕃。陳蕃の伝は『後漢書』卷六六、范滂の伝は同じく卷六七、郭太の伝は卷六八に収められる。陳蕃、范滂は後漢末に宦官と対立したいわゆる「党錮の禍」にかかった人々である。陳蕃は寶武らとはかり、宦官の曹節らを誅殺しようとしたが、事が露見し、殺害された。范滂は、捕らえられ、死地に赴かんとした際、その母親が義のために死ぬことは名誉であるといつて励ましたことで知られる。郭太もやはり陳蕃らの仲間であつたが、危険な発言をしなかつたために、命ながらえることができ、千人もの弟子を教導した。冒裏がこの後漢の党錮の伝を読んで机をたたいたというのは、明代に宦官一派と対立した東林、復社と重ねあわされているからである。董小宛の述べた「持平の論」とはどのような論だったのだろうか。

(27) 乙酉客鹽官、嘗向諸友借書讀之。凡有奇僻、命姬手抄。姬於事涉閨閣者、則另錄一帙。歸來與姬遍搜諸書、續成之、名曰奩艷。其書之瑰異精祕、凡古人女子自頂至踵、以及服食器具、亭臺歌舞、針神才藻、下及禽魚鳥獸、即草木之無情者、稍涉有情、皆歸香麗。今細字紅箋、類分條析、俱在奩中。客春、顧夫人遠向姬借閱此書、與龔奉常極讚其妙、促繡梓之。余即當忍痛爲之校讐鳩工、以終姬志。

乙酉の年(順治二年 一六四五)、海寧に寄寓した時、よく友人たちから書物を借りて読んだ。変わった珍しい記事があると、彼女に命じて書き写させた。彼女は女性に関わる記事があると、別に一冊のノートに書き写していった。家に帰ってから、彼女といっしょに諸書をあまねく捜してそれを続けて完成させ、「奩艶」と名づけた。その書は珍しくかわつていくわしくもあり、昔の女性について、頭の中から足の先まで、衣服食事家具、亭台歌舞、裁縫や文才から下は禽獸鳥魚、無情の草木にいたるまで、すこしでも女性にかかわるものであれば、香わしく美しい言葉で表現し収録したのである。今彼女の細かい文字で書かれた赤い原稿紙が、項目ごとに分類整理されて化粧箱のなかにはいつている。昨春、顧夫人が遠くから彼女に借りて読み、龔奉常がそのすばらしさをほめちぎり、出版することをすすめた。わたしはすぐにでも悲しみをこらえて、これを校訂し職人を集めて、彼女の志を遂げてやらなければならぬまい。

【訳注】

○「奩艶」。陳維崧『婦人集』(『如皋冒氏叢書』所収)に、「秦淮董姬(字小宛)才色擅一時。後婦如冒推官(名襄)。明秀溫惠、与推官雅相称。居艷月樓、集古今閨幃軼事、薈為一書、名曰奩艶。王吏部撰朱鳥逸史、往往津逮之」とある。清の王初桐に『奩史』(嘉慶二年刊)があり、その内容がまさしくこの「奩艶」の内容と同じようなものである(中国人民大学出版社排印本一九九四がある)。

○「顧夫人」。顧眉。前出(第十七段)。龔奉常は龔鼎孳。

(28) 姫初入吾家、見董文敏爲余書月賦、倣鍾繇筆意者、酷愛臨摹。嗣遍覓鍾太傅諸帖學之。閱戎輅表、稱關帝君爲賊

將、遂廢鍾學曹娥碑。日寫數千字、不訛不落。余選有選摘、立抄成帙。或史或詩、或遺事妙句、皆以姬爲紺珠。又嘗代余書小楷扇存戚友處。而荆人米鹽瑣細、以及内外出入、無不各登手記、毫髮無遺。其細心專力、卽吾輩好學人鮮及也。

彼女がわたしの家に來たばかりのころ、董文敏（其昌）がわたしのために鍾繇の筆意で書いてくれた「月の賦」を見て、たいへん気に入り臨書した。続いてあちこちで鍾太傅の諸帖を搜し求めてこれを学んだ。だが、「戎路表」で閔帝（閔羽）のことを賊將といっているのを見てから、鍾をやめて「曹娥碑」を学ぶことにしたのである。彼女は一日に数千字も書いたが、誤りもなく抜け落ちもなかった。わたしが何か書き抜いておくものがあると、彼女がすぐに書き写し、綴じておいてくれた。歴史であれ詩であれ、逸事であれ妙句であれ、なんでも彼女のことを便利な心覚えにしたのである。また私に代わって小楷の扇面を書いてくれたのが親戚友人のところにある。そして妻の日常の家計簿、内外の出入り、みな彼女が手ずから書いたものであって、ほんのすこしも書き落しかなかった。彼女の細心さと集中力は、われわれ好学のものでもこれに及ぶものは少ないのである。

杜茶村曰、閔秀較書鑑賞、唐有薛濤、宋有李易安。濤風塵老醜、易安失身匪人、終爲風雅之玷。宛君才藻精敏、益見芳貞、而眞嗜殊好、本之天性。方之大家女史何愧。

杜茶村曰く「女性で書物を校訂したり、書画を鑑賞したりしたものでは、唐には薛濤があり、宋には李清照がい

る。しかし、薛濤は苦界に老醜をさらし、易安は賊人に汚されたことが、風雅のきずになっている。宛君は文才にすぐれたうえに、さらに貞節でもあつて、そのすぐれた趣味嗜好は天性にもとづくものである。彼女を大家の女子に並べても遜色ないのである。」

【訳注】

○「董文敏」。董其昌。『同人集』巻一に董其昌の「香儷園偶存詩序」がある。『香儷園偶存』は冒襄十四歳の詩集。『如臯冒氏叢書』に収められる。序では董其昌は冒襄の神童ぶりを、前身の老詩人の再来かといつて称賛している。鍾繇は三国魏の人。王羲之と並んで「鍾王」と称される。董其昌『画禅室随筆』では「吾字書在十七歲時。…以為唐書不如晉魏。遂倣黃庭經及鍾元常宣示表、戎路表、力命表、還示帖、丙舍帖。凡三年、自謂逼古」といい、鍾繇の「宣示表」「戎路表」「力命表」「還示帖」「丙舍帖」などを学んだといっている。「月賦」は謝莊の作（『文選』巻一三）。

○「曹娥碑」。王羲之の書。

○「紺珠」。唐の張説は紺色の宝珠を持っていたが、思い出せない事があるとき、その珠をまさぐると何でも思い出した。『開元天宝遺事』「記事珠」にみえる。

○「薛濤」。中唐の女性詩人。妓女。「女校書」と称される。白居易、元稹などと詩のやりとりをした。

○「李易安」。李清照。宋の女性詞人。ここでさういわれているのは、夫趙明誠の没後、張汝舟に再嫁したことを指す。胡仔『苕溪漁隱叢話』前集巻六十、王灼『碧鷄漫志』巻二ほか、このことを否定的に評価している。

(29) 姫於吳門曾學畫未成。能作小叢寒樹、筆墨楚楚。時於几硯上輒自圖寫。故於古今繪事、別有殊好。偶得長卷小軸

與筭中舊珍、時時展玩不置。流離時寧委奩具、而以書畫捆載自隨。末後盡裁裝潢、獨存紙絹、猶不得免焉。則書畫之厄、而姬之嗜好、眞且至矣。

彼女は蘇州にいたとき、絵を学んだが十分に習得したわけではなかった。しかし、小さな草むらや冬枯れの樹木を描くことができ、その筆使いは細やかであった。しばしば机に向かつては、ひとりで絵を描いていた。そのため古今の絵画を、特に好んでいた。たまに長巻や小軸、あるいはつづらの中から骨董品などを手に入れると、しょっちゅうひろげてはいつまでもながめていた。(清初の際、避難したとき、嫁入り道具をすべてまでも書画をしばって持ってきた。最後には表装をすっかり切り落とし、絵をかけた紙と絹だけになっても、それでも手離そうとしなかったのである。書画にとっては災難であったが、彼女の好みは本物で徹底していたということなのである。

【訳注】

○以上の六段、『如皋冒氏叢書』本では、「紀詩史書画」としてまとめられている。この前後は詩史書画にはじまって、茶、香、花、月などの趣味について語っている。

○ここは絵画についての一段。『琴棋書画』は妓女のたしなみでもあった。『同人集』巻六に吳偉業の「巢民先生貽宛君篋中藏扇索書再題二絶句」を収める(『吳詩集覽』巻一八下では「又題董君画扇」と題する)。

(30) 姬能飲、自入吾門、見余量不勝蕉葉、遂罷飲。每晚侍荆人數杯而已。而嗜茶與余同性、又同嗜芥片。每歲半塘顧

子兼擇最精者緘寄、具有片甲蟬翼之異。文火細煙、小鼎長泉、必手自吹滌。余每誦左思嬌女詩吹噓對鼎鑪之句、姬爲解頤。至沸乳看蟹目魚鱗、傳盜選月魂雲魄、尤爲精絕。每花前月下、靜試對簞、碧沈香泛、眞如木蘭沾露、瑤草臨波、備極虛陸之致。東坡云、分無玉腕捧蛾眉、余一生清福、九年占盡、九年折盡矣。

彼女はいける口であつたが、わたしの家に来てからというもの、わたしがすこしばかりもいけないのを見ると、飲むのをやめた。毎晩妻につきあつて数杯飲むだけであつた。しかし、お茶好きはわたしと同じであつて、さらにともに茶片が好みであつた。毎年、半塘の顧子兼がいちばんいいところを選び密封してわたしに送ってくれる。それは龍のうろこのようにかわつていて、蟬の羽根のように美しいものであつた。弱火で煙を細くし、小さな鼎で泉の水をわかすのにも、必ず彼女みずから火を吹き茶道具を洗つた。それを見てわたしが左思の「嬌女の詩」の「吹噓して鼎鑪に對す」の句を誦するたびに彼女は笑つたものであつた。「乳を沸かしては蟹目魚鱗を看、盜を伝えては月魂雲魄を選ぶ」ということについて、彼女はとりわけすぐれていた。春は花の前、秋は月の下、静かに向かい合つて彼女とお茶を味わつてみると、茶葉は緑に沈み、香りはただよい、まことに「木蘭が露にうるおい、瑤草が浪に臨む」といったありさまで、盧仝・陸羽の境地を極めていたのであつた。東坡は「分に玉腕の蛾眉に捧げしむるなし」といったが、私の場合、一生の清福は彼女と過ごした九年のあいだに窮め尽くし、九年のあいだにすっかり使い果たしてしまつたのである。

【訳注】

○以下の数段、『如皋冒氏叢書』本では「紀茗香花月」としている。

○「蕉葉」。小さな酒杯。陸元光『回仙錄』に「飲器中、惟鍾鼎為大、屈卮螺杯次之、而梨花蕉葉最小」とある。

○「芥片」。浙江省長興鼎羅芥山で産する銘茶。冒襄には『芥茶彙鈔』の著書がある（『如皋冒氏叢書』所収）。上等のお茶で、袁宏道「龍井」に「芥茶葉粗大、真者每斤至二千餘錢」とある。

○「半塘顧子兼」。未詳。『芥茶彙鈔』によれば、顧子兼は毎年虞山の柳夫人（錢謙益の側室）、如皋隴西の倩姬、そして冒襄と董小宛にまつ先に送ったとあるから、顧氏は茶商人であつたのかもしれない。

○「文火細煙、小鼎長泉」。劉源長『茶史』卷二「湯候」に「顧況号通翁、論煎茶云、煎以文火細煙、小鼎長泉」とある。

○「左思嬌女詩」。『玉台新詠』卷二に見える。「心為茶寂劇、吹噓對鼎鑪（心茶寂の為に劇し、吹噓して鼎鑪に對す）」。「おてんばな娘の様子を描く。だから彼女が笑つたのである。」

○「沸乳看蟹目魚鱗、伝盜選月魂雲魄」。皮日休の「茶中雜詠」「茶甌」の「円似月魂墮、輕如雲魄起」、「煮茶」の「時看蟹目濺、乍見魚鱗起」をふまえた表現。「蟹目魚鱗」はお湯が沸き立つ時の泡の形容。

○「木蘭沾露、瑤草臨波」。劉禹錫の「西山蘭若試茶歌」の「木蘭墮露香微似、瑤草臨波色不如」をふまえる。

○「盧陸之致」。盧仝と陸羽。盧仝には「走筆謝孟諫議寄新茶」の詩があり、茶の徳を詠じている。陸羽は『茶経』の著者。

○「東坡云、分無玉腕捧蛾眉」。蘇軾「試院煎茶」の一句。蘇東坡は、お茶を捧げて持ってきてくれる美人はいない、というが、冒襄にはそれがあつたといっているのである。

(31)

姬每與余靜坐香閣、細品名香。宮香諸品淫、沈水香俗。俗人以沈香著火上、煙撲油膩、頃刻而滅。無論香之性情

未出、即著懷袖皆帶焦腥。沈香有堅緻而紋橫者、謂之橫隔沈。即四種沈香內革沈橫紋者是也。其香特妙。

彼女はわたしと部屋で静かに座っているときにはいつも、名香を細かく品評したものであった。宮香の諸香はどぎつく、沈水香は俗だ、と彼女はいうのであった。俗人は沈香を直接火の上に置いてしまうが、そうすると煙が鼻につき、油くさくなるし、すぐに燃え尽きてなくなってしまう。本来の香りが出ないことはいうまでもなく、衣服についた香りも、焦げ臭く生臭みを帯びてしまうのである。沈香で、堅くて肌理細やかで横に筋目がついているものは「横隔沈」という。四種の沈香のうちの「革沈横紋」というのがそれである。その香りは特にすばらしい。

【訳注】

○「宮香」。明の周嘉曹の『香乘』巻七に「宮掖諸香」があり、薰香をはじめとする諸香についての記述がある。

○「煙撲」。明の劉基の「売柑者言」に「剖之如有煙撲口鼻」とあるように、つんと鼻をつくこと。

○「横隔沈」。『香乘』巻一に引く『南番香録』に「其堅緻而紋横者、謂之横隔沈」とある。

○「四種沈香」。『本草綱目』木部第三四卷「沈香」に、「角沈黒潤、黄沈黄潤、蠟沈柔韌、革沈紋横、皆上品也」とある（『香乘』巻一に引かれている）。

(32) 又有沈水結而未成、如小笠大菌、名蓬萊香。余多蓄之。每慢火隔砂、使不見煙。則閣中皆如風過伽楠、露沃薔薇、熱磨琥珀、酒傾犀辟之味。久蒸衾枕間、和以肌香、甜艷非常、夢魂俱適。

また沈水香で、（香りのもとになる樹脂分が）まだ完全に凝結しておらず、小さな笠、大きなきのこぐらいのものがあり、「蓬萊香」という。わたしはそれをたくさんもっていた。焚く時にはいつも火をゆるくし、砂をしいて煙がでないようにする。すると、部屋の中は伽羅の香りが風によつて吹き送られてきたかのように、薔薇の花に露を注いだかのように、琥珀が磨かれて暖かくなったかのように、酒を犀の角でできた杯に注いだかのような味わいがあるのであった。時間をかけて布団や枕の間にくゆらせば、人肌の香りと一緒になつて、そのなまめかしさは尋常ではなく、すばらしい夢ごちになれるのであった。

【訳注】

○「蓬萊香」。『香乘』卷一に引く『桂海虞衡志』に記載がある。「蓬萊香、即沈水香。結未成者、多成片。如小笠大菌之状」云々とあり、ほぼこと同文である。

(33) 此外則有眞西洋香方。得之内府、迴非肆料。丙戌客海陵、曾與姬手製百丸。誠閨中異品、然熱時亦以不見煙爲佳、非姬細心秀致、不能領略到此。

そのほかには本物の西洋香があつた。それは宮中で手に入れたものであつて、まったくそこらあたりで買えるしろものではなかつた。丙戌の年（順治三年 一六四六）海陵に滞在して、彼女と手ずから百丸を作つたことがあつた。まことに閨中の異品であつたが、熱するときにやはり煙がたたないのがよいとされ、彼女ほどの細心でみごとな手さ

ばきがなければ、ここまで深くその味わいを知ることではできなかったろう。

(34) 黄熟出諸番、而眞臘爲上。皮堅者爲黄熟桶、氣佳。而通黑者爲夾櫟黄熟。近南粵東莞茶園村、土人種黄熟、如江南之藝茶。樹矮枝繁、其香在根。自吳門解人剔根切白、而香之鬆朽盡削、油尖鐵面盡出。余與姬客半塘時、知金平叔最精於此、重價數購之。塊者淨潤、長曲者如枝如虬、皆就其根之有結處、隨紋縷出、黄雲紫繡、半雜鷓鴣斑、可拭可玩。

黄熟はさまざまな蜜地に産出するが、眞臘（カンボジア）のものが最上とされている。皮が堅いものは「黄熟桶」といい、すぐれた香氣がある。黒いのは「夾櫟黄熟」である。近頃、南の広東東莞の茶園村で、土地の人が黄熟を植えているが、江南地方で育てているお茶の木のようなのである。背が低く、枝がこんもり茂っており、その香りのもと根っこにある。蘇州の通人が根の部分をはじくり出し、真っ白にむき、香の腐って柔らかくなった部分を全部取り除くと、てかてか油ぎって鉄のようにかたいところがすっかりあらわれる。わたしが彼女と半塘に滞留していたとき、金平叔がそれに最も精通していることを知り、高い値段でしばしばそれを購入した。かたまりのは混じりけがなくてかかし、長く曲がったのは枝のようみずちのようで、いずれもその根のこぶになったところから、黄色い雲、紫の刺繡、あるいは鷓鴣の斑のような模様があらわれており、なでさすって愛玩するのによろしかった。

【訳注】

○「黄熟香、夾棧香」。周嘉胄『香乘』卷一「黄熟香」に引く『香録』に「黄熟香夾棧香。黄熟香、諸蕃出、而真臘為上。黄而熟、故名焉。其皮堅而中腐者、其形狀如桶、故謂之黄熟桶。其夾棧而通黑者、其氣尤勝。故謂夾棧黄熟。此香雖泉人之所日用、而夾棧居上品」とある。また同じ条に「近時東南好事家、盛行黄熟香、又非此類。乃南粵土人種香樹如江南人家藝茶趨利。樹矮枝繁、其香在根。剔根作香、腹可容數升、実以肥土、數年復成香矣。以年逾久者逾香。又有生香、鉄面油尖之称。故広州志云、東莞県茶園村香樹出於人為、不及海南出於自然」とある。東莞県についての記述は『香乘』の地の文であるから、冒裏はこの書を見ていたのであろう。

(35) 寒夜小室、玉幃四垂、氍毹重疊、燒二尺許絳蠟二三枝。陳設參差、臺几錯列。大小數宣爐、宿火常熱、色如液金粟玉。細撥活炭一寸、灰上隔砂選香蒸之、歷半夜、一香凝然、不焦不竭、鬱勃氤氲、純是糖結。熱香間有梅英半舒、荷顰梨蜜脾之氣、靜參鼻觀。憶年來共戀此味此境、恆打曉鐘、尚未着枕。與姬細想閨怨、有斜倚薰籃、撥盡寒爐之苦、我兩人如在蕊珠衆香深處。今人與香氣俱散矣。安得返魂一粒、起於幽房局室中也。

寒い晩に小さな部屋で、四方に玉のカーテンを掛け、しきものを重ね、二尺ほどの赤いろうそくを二三本灯してある。室内はちらかっており、台や机もあちらこちらにめちやくちやに置かれている。大小いくつかの宣炉にはずっと熱く火が燃えさかっており、炎の色は金を溶かしたよう、玉の粒のようである。そこに気をつけながら一寸ほどの燃えている炭を灰の上に置き、砂をかぶせてその上に香を選んで置き、蒸してやると、真夜中になって、香がたちもと

ほり、焦げず尽きず、あたりにただよって、まことに糖結の香りであった。香をあたためている間に、半ば開いた梅の花の香り、鵝梨や蜂の巣のような香りが、静かに鼻に入ってくるのであった。年来この味この境地を楽しみにしていつも夜明けの鐘がなつてもまだ床につかず、彼女と細かに閨怨を思い、「斜めに薫籠により」「寒炉をすっかりかきたてる」といった境地を味わうのであった。するとわたしたち二人は、さまざまな香気たよう薬珠宮の奥深くにいるように思われるのであった。今や人も香気とともに散じてしまった。返魂香の一粒でも手にいれて、この暗く閉ざされた部屋にたつてほしいものである。

【訳注】

○「糖結」。わが国崑崙先生の『香志』『奇南香』に引く明倪朱謨『本草彙言』に「四品之中又各分別、油結、糖結、密結、緑結、金絲結」云々とある。

○「鵝梨」。梨の一種であるが、馮贄『南部煙花記』『帳中香』に「江南李主帳中香法、以鵝梨蒸沈香用之」とある。「密脾」はミツバチの巣。『香乘』巻一に引く范成大『桂海虞衡志』に「鵝梨蜜脾」という同じ表現が見える。沈香の香りを表現することば。

○「鼻觀」。鼻のあな。蘇軾の「和魯直韻（宝薰）」詩に「且令鼻觀先參」の句がある。

○「斜倚薰籠」。白居易「後宮詞」に「斜倚薰籠坐到明」の句がある。

○「撥盡寒爐」。呂蒙正の詩句「撥盡寒爐一夜灰」（任淵『山谷詩集注』卷一六「次韻高子勉十首」に引く）。

○「藥珠」。仙宮である薬珠宮のこと。

○「返魂一粒」。返魂香。漢の武帝が李夫人を思って作らせたという言い伝えがある（『増刊校正狀元集註分類東坡先生詩』卷

一四「岐亭道上見梅花戲贈季常」に「(程) 續曰」として「李夫人死、漢武帝念之不已、乃令方士作返魂香燒之、夫人乃降」とある。ここでは小宛を呼び戻すよすがとしてこの故事を用いている。

(36) 一種生黃香、亦從枯瘡朽癰中、取其脂凝脉結、嫩而未成者。余嘗過三吳白下、遍收筐箱中。蓋面大塊、與粵客自攜者、甚有大根株塵封如土。皆留意覺得。攜歸與姬爲晨夕清課、督婢子手自剝落、或勸許僅得數錢。盈掌者僅削一片、嵌空鏤剔、纖悉不遺。無論焚蒸、卽嗅之味如芳蘭、盛之小盤層撞中、色殊香別、可弄可餐。曩曾以一二示粵友黎美周、訝爲何物、何從得如此精妙。卽蔚宗傳中恐未見耳。

一種の生黃香があり、枯れて腐った木のこぶから、その樹脂が脈のようにこりかたまつて、やわらかくまだ固まつていないところを取るのである。わたしはかつて蘇州・南京を訪れ、それを手に入れて箱のなかに収めた。顔をおおえるくらいの大きなかたまりで、広東から来たひとがもってきたもの、なかには太い根っこに土のように塵がついているものがあつた。それらをみな気をつけて搜し求めた。持ち帰つて彼女と朝夕の日課に、下女を監督してその皮をむかせたが、あるいは一斤から数錢ほどしかとれないものもあつた。掌いっぱいからわずかに一片ということもあつたが、細心にほじくり出して、少しばかりも残さなかつた。焚くときでも蒸すときでも、その香りをかげば、芳蘭のようであつたことはいふまでもないが、それを重ねられた小さなさらに盛れば、その色と香りは特別であり、もてあそび、香りを味わうのによかつた。以前その一つ二つを広東の友人黎美周に見せたところ、びっくりして「これはいったい何物だ、どこからこんな精妙なものを手に入れたのだ、范曄の書物にもおそろくは出ていまい」といった。

【訳注】

○「黎美周」。黎遂球。『明史』卷二八七に伝がある。『同人集』卷五「影園唱和集」に黎遂球の作が収められている。

○「蔚宗」。『後漢書』の撰者である范曄のこと。范は香法に詳しく、「和香序」がある（『香乘』卷二八に収める）。

(37) 又東莞以女兒香爲絶品。蓋土人揀香、皆用少女。女子先藏最佳大塊、暗易油粉。好事者復從油粉擔中易出。余曾得數塊於汪友處、姬最珍之。

また東莞県では、女兒香を絶品としている。思うに、土地の人は香をよりわけると、どこも少女を使う。女の子たちは最初にいちばんよい大きな塊をしまいこんで、こっそり自分の髪油や白粉にかえてしまう。好事家はさらに化粧品売りのかごのなかから、その香を手に入れる。わたしもかつて数塊を友人の汪氏のところで手にいれたことがあるが、彼女はそれを最も珍重したものであった。

【訳注】

○東莞の女兒香については『広東新語』卷二六「香語」「莞香」の条に見え、「凡種香家、其婦女輒於香之稜角、潛割少許藏之、名女兒香。是多黑潤、脂凝、鉄格、角沈之類。好事者爭以重価購之」云々とある。

(待続)